

## 一第99編一 永田の集落

初めて訪れた屋久島<sup>\*1</sup>の印象はまことに鮮烈であった。そこで遭遇した南の島の洋上生活圏は、鹿児島県という近代の行政区分や、数多の島々からなる「島嶼（とうしょ）地域」というくくりではとうてい理解できない、島独特の自然環境と生活文化で彩られている。しかも、それらは驚くほど多彩である。その一端を、「洋上のアルプス」という異名をもつ稀有な屋久島でまず触れることができた。その後、沖縄本島近くの沖永良部島<sup>\*2</sup>まで南下しながら、近傍のいくつかの島を訪れる機会があり、その歴史や文化に触れる過程で、「日本列島」として私が理解していた空間的な広がりとは全く異なる別世界が広く、深くそこにあることを知った。

調査の過程で得られた貴重な体験の一つは、屋久島の西側に位置する永田の集落に残る伝統的な家並みと住宅の配置やつくり方、暮らし方の発見であった。日本国内でも極端に多い雨量（島の沿岸部で約4,400mm、中央部では11,000mm）、その結果としての高い湿度、そしてシロアリの発生、頻繁に訪れる台風、その塩害等々、外部の我々



写真99-1 永田の民家と前岳

\*1 鹿児島県熊毛郡屋久島町・近傍の種子島等と大隅諸島を形成

\*2 沖永良部島・鹿児島県大島郡に属する奄美群島南西部の島



写真99-2 民家に沿って流れる水路

あるのは、屋根を葺く茅がとれずスギの平木か石置きであったこと、そして雨の多さや密集した家屋配置がその主な理由である。このように材料や工法の限られた選択肢のなかからでも、厳しい気候条件を緩和しようとする工夫が、実に魅力的で美しい情景やまちなみを伴った居住環境を生み出すことができる、そのことを我々は真摯に学ぶべきである、と思った。バナキュラーなものを持つ意味と力をここにも見る事ができた。

我々は2000年を前後して、縁あってこの屋久島に平屋50戸からなる木造平屋公営（県営+町営）住宅団地を設計する機会を鹿児島県から与えられた。そのブレ・デザインの調査の段階でこの永田の集落に出会い、目指すべき方向性を示す大きな指標と確信を発見することができたのは幸いであった。

から見れば実に過酷な自然環境に見える。しかし、この永田では、こうした厳しい条件が要求した外構と住まいの配置、形状、工夫が一体となって、非常に美しく安定したまちなみ景観と住空間を生み出し、今に伝えている。例えば、入母屋が多い南方住宅のなかで、屋久島の伝統的な民家の殆どが切妻平入りで



写真99-3 石垣と入口周り